

# 第2学年 組 算数科指導と評価の案

日時：平成16年12月3日（金）公開2

場所：2年 組教室

授業者：船坂まゆみ（T1）、齋藤梨絵（T2）

1, 単元名 たすのかなひくのかな（4/7時）

2, 本時の目標 求算の逆思考の問題（ $-a=b$ ）に対し、テープ図で帰った数・残りの数・はじめの数の関係を考える算数的活動を通して、 $a+b$ の加法の考えを使って、正しく答えを求めることができる。

3, 本時の評価規準

数学的な考え方：減る前の数を求める逆思考の問題を、テープ図で数量関係を表す算数的活動を通して、残った数に減った数を加えればよいと考える。

4, 本時の展開

過程	主な学習活動	学習集団	子どものつまずきに応じた指導・援助
問題提示	<p><b>1 子どもが遊んでいる場面を提示する。</b></p> <p>（問題）</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;">公園に子どもが何人かあそんでいました。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;">そのうち9人が帰りました。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;">のこりが6人になりました。</div> </div> <p>子どもははじめに何人いたでしょう。</p> <p>「問題から見つけましょう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>わかってしていることは、9人帰った、残りが5人、聞いていることは子どもははじめに何人いたのかということ。</li> <li>ひき算かな。『帰りました。のこりが』とあるよ。</li> <li>たし算かな。『はじめに何人?』とあるよ。</li> <li>アイテムはテープ図で考えるといいよ。</li> </ul>	全体	<p>T1, T2の役割評価 評価規準に達している児童はT2, 達していない児童はT1が指導・援助にあたる。</p> <p>つまずきの様子 見通しをもつ段階</p> <p>C: 問題場面（数量の関係）が把握できない。（黒板にはったネームプレート）</p> <p>T1: 場面の様子を把握し易いように、帰った子どもの数と残った子どもの数を絵で提示する。</p>
課題化	<p><b>2 はじめの子どもの数が何人が問う。</b></p> <p>「はじめにいた子どもの数の求め方を考えましょう。」</p> <p>（課題）テープ図をつかって、はじめにいた子どもの数のもとめ方を考えよう。</p> <p>支援を受ける先生コースと、自力解決する自分コースの、学び方別のコースを選択するため、ネームプレートにより自己決定をする。</p>	先生コース（廊下側） 自分コース（窓側）	<p>B: 問題場面（数量の関係）が把握できる。（黒板にはったネームプレート）</p> <p>T2: 児童の発言の根拠を尋ねる。なぜそのように考えたのかな。</p>
課題追究	<p><b>3 テープ図を使って、答えの求め方を考える。</b></p> <div style="text-align: center;"> </div> <p><math>9 + 6 = 15</math>      答え（15人）</p> <p><math>6 + 9 = 15</math>      答え（15人）</p> <p><math>9 = 6</math>              答え（15人）</p>	個	<p>廊下側でのT1の支援</p> <p>C1: 場面把握がまだ十分できていない。（ワークシートと質問）</p> <p>T1: 場面の絵を順に見せる。「何人が子どもがいるよ。」「そして9人帰りました。」「のこりは6人になったよ」人数がわからないのは、どれかな。</p> <p>C2: テープ図を書くことに時間を要している。（ワークシート）</p> <p>T1: はじめの数はわからないのだから、テープの長さは大まかでいいね。テープのどこに、何の数を入れるかが大切だね。</p>
解決	<p><b>4 児童同士交流をする（交流の形態）</b></p> <p>先生コース・・・T1と交流 自分コース・・・友達またはT2と交流</p> <p><b>5 全体で求め方を確かめる。</b></p> <p>「絵とテープ図をならべて考えてみましょう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『9人帰ったら、6人になった。』ということは、帰った9人をもとにもどすと、はじめの子どもの数がわかるよ。</li> <li>6人のところに9人がもどるのだから、はじめの子どもの数はたし算で出すことができる。</li> </ul> <p>「式はどうなりますか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>問題には『帰りました』『のこりは』とあるけど、はじめの数をもとめるので、式は<math>9 + 6 = 15</math> または <math>6 + 9 = 15</math> 答えは15人。</li> </ul> <p>（まとめ） はじめの全体の数をもとめる時は、たし算をつかえばよい。</p>	ペア（任意） 全体	<p>C3: 「帰りました」「のこりは」の言葉から、ひき算で立式している。（ワークシート）</p> <p>T1: テープ図を書かせる。「はじめの数はどこかな。帰った数の9人は、のこった6人はどこかな。」はじめの数はなに算でもとめられそうかな。</p> <p>T1: <math>9 - 6</math>にすると答えは3人だね。はじめの子どもの数が3人だと、9人も帰ることができないね。</p> <p>C4: たし算で立式して答えを求められるが、立式の理由がはっきりしない。（ワークシートと交流のお話）</p> <p>T1: テープ図をもとに話してみよう。なぜ9と6を足したのかな。</p>
一般化	<p><b>6 求算の逆思考の評価問題（<math>a=b</math>）に取り組む。</b></p> <p>教室から8人帰ったので、のこりが9人になりました。教室には、はじめ 何人いたのでしょうか。</p> <p>帰った数8人      のこりの数9人</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">はじめの数 人</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">（評価問題の意図） 問題の場面把握をして、テープ図に必要な数を書き込みたし算によって正しく答えを求めることができるか確かめる。</div> </div> <p><math>8 + 9 = 17</math> または <math>9 + 8 = 17</math> 答え（17人）</p>	個	<p>窓側でのT2の支援</p> <p>B: テープ図を書き、立式の根拠について説明ができる。（ワークシートと交流のお話）</p> <p>T2: 説明を聞き、児童の考えを認めて自信をもたせる。なぜたし算をしたのかお話しできるかな。</p>
評価	<p><b>7 自己評価をする。</b></p> <p>（自分のがんばりを自覚し、次の時間への意欲につなげる。） 4つの項目で評価をおこなう。</p>		<p>評価問題における段階</p> <p>C: 問題場面に対応させた立式ができない。立式した理由を説明できない。（学習プリント）</p> <p>T1: テープ図を書いてみよう。何算で求めるとよいか。テープ図をもとに話してみよう。なぜ8と9を足したのかな。</p> <p>B: 評価問題を自力で解決できる。（学習プリント）</p> <p>T2: 立式の根拠を説明させ、その後のコース別問題を見届ける。</p>

